

アルティメット選手の心理的競技能力について

第三報

～ウィメンオーストラリア代表選手と日本代表選手の比較～

瀧澤寛路¹⁾・村本名史²⁾・栗田泰成³⁾・笹川 慶⁴⁾

On Psychological Competitive Ability of Ultimate Players

The Third Report

～ Comparison of Ultimate Female Players in Australia and Japan National Teams ～

Hiromitsu TAKIZAWA Morifumi MURAMOTO Yasunari KURITA
Kei SASAKAWA

要 旨

本研究の目的は、アルティメットのウィメンオーストラリア代表選手、並びに、日本代表選手を対象に「心理的競技能力診断検査 (Diagnostic Inventory of Psychological Competitive Ability for Athletes, 3) 以下 DIPCA.3 と略す」を実施し、心理的競技能力の違いを明らかにすると共に、アルティメットにおける競技能力向上の為の基礎的資料を作成することである。

オーストラリア代表選手における DIPCA.3 の総合得点の平均値は、187.95 であり、一方、日本代表選手における平均値は 175.00 というものであった。総合得点の平均値は、オーストラリア代表選手が、日本代表選手に比べて有意に高かった。オーストラリア代表選手の心理的競技能力が高いことが考えられる。

また、DIPCA.3 における 5 因子の中でも、精神の安定・集中、自信、作戦能力の 3 因子の平均値では、オーストラリア代表選手が日本代表選手に比べて有意に高いことが明らかになった。その一方で、競技意欲の平均値では、日本代表選手がオーストラリア代表選手に比べて有意に高いことが明らかになった。

さらに、DIPCA.3 における 12 尺度においても、有意な差が観察されたが、忍耐力、自己コントロール能力、リラックス能力、自信、決断力、予測力、判断力という 7 尺度の平均値では、オーストラリア代表選手が、日本代表選手に比べて有意に高い値を示した。その一方で、勝利意欲の平均値では、日本代表選手が、オーストラリア代表選手に比べて有意に高い値を示した。オーストラリア代表選手が、忍耐力や闘争心は決して低くはないのにも拘らず、勝利意欲が高くはないという結果は特徴的であった。

従って、オーストラリア代表選手は、日本代表選手に比べて、緊張を強いられる場面であってもリラックスしてパフォーマンスを発揮し、また、失敗を恐れず、自信を持って、ゲームをコントロールでき、さらには、冷静で落ち着いたプレーをコンスタントに実施できることが推察される。

Abstract

The purpose of this study was to examine the psychological competitive ability of Ultimate female players in Australia and Japan national teams to collect basic data for competitive ability improvement. The average total score on the Diagnostic Inventory for Psychological Competitive Ability 3 (DIPCA.3) was 187.95 for national female players in Australia and 175.00 for national female players in Japan. This suggests that psychological competitive ability of national female players in Australia was significantly higher than in the national female players in Japan. When comparing their scores with regard to the “five factors,” it was evident that the scores of national female players in Australia were higher than their Japanese counterparts in mental stability and concentration,

1) 常葉大学経営学部経営学科 2) 常葉大学健康プロデュース学部心身マネジメント学科 3) 常葉大学健康科学部静岡理学療法学科

4) 上智大学文学部保健体育研究室

confidence, and strategic ability. Examination on the “twelve scales” also showed a significant difference between the groups – the national female players in Australia had significantly higher scores than the national female players in Japan – on the endurance capacity, scales of self-control, ability to relax, confidence, decision, predictive, capability, and judgment. No significant difference was found in both groups with regard to the average total score on fighting spirit. On the other hand, the average total score on the motivation to win was significantly higher in the national female players in Japan when compared to those in Australia. We focused on the findings that the fighting spirit was significantly lower in the national female players in Australia compared to the national female players in Japan despite the results of endurance capacity and fighting spirit. In conclusion, the national female players in Australia had more stable performances, more accurately controlled the game, and played more calmly in comparison to the national female players in Japan. In addition, they could consistently and accurately evaluate a situation in a variety of circumstances

はじめに

アルティメット^{注1)}は、『1 チーム7名からなる2 チームが、100m × 37m のコート内でフライングディスク^{注2)}をパスにより運び、相手エンドゾーン（ゴール）内で味方からのパスをキャッチすれば、ポイント（1点）となるディスク版のアメリカンフットボール。スピードや持久力、ディスクのスロー技術、チーム戦術等、フライングディスクのあらゆる要素が集約されることから、ULTIMATE（究極）と呼ばれる。』²⁾

近年、我国におけるアルティメットチームは大学生を中心に増加の傾向にあり、今年度（平成28年度）、日本アルティメット協会に登録しているチームは、メン部門に大学生と社会人を合わせて140、ウィメン部門に同じく94、男女混合のミックス部門には同じく26、満33歳以上のメンマスター部門に6、満30歳以上のウィメンマスター部門に1、さらに、性別不問・小中高生を対象としたユース部門に19であり、合計すると286チームである。

さらに、アルティメットの日本代表チームは、諸外国には体格差では劣るというハンディキャップを、スピードとスロー技術、チーム戦術等で補い、国際大会において、現在までに数々の好成績を挙げている^{注3)}。因みに、本年7月イギリスのロンドンで開催された世界アルティメット&ガッツ選手権大会（以下2016WUGCと略す）では、メン部門では準優勝、ウィメン部門は4位、ミックス部門は6位という好成績を残しており、我国は世界でも有数のアルティメット強国と云えよう。

その一方で、我国においてアルティメットの認知度は未だ乏しく、ニュースポーツ、マイナースポーツと云われて久しい。現行では、アルティメットは発展・普及の途上にあると考えられる。しかしながら、アルティメットはラグビーやサッカーにも決して引けを取らない激しさと高い競技性を持ち合わせているスポーツである。

従って、プレーヤーの体力、技術、チーム戦術のみな

らず、当然、メンタルコントロールも重要なスキルになるが、アルティメット選手を対象としたメンタル面への科学的なアプローチはほとんど見当たらないのが現状である。

そこで、筆者らは第一報⁹⁾にて、アルティメット選手を対象として、徳永らが開発したDIPCA.3を実施し、アルティメット選手の心理的競技能力を性差に着目し、以下のような結果を得ている。

先ず、アルティメット選手の心理的競技能力は、5因子の中でも、精神の安定・集中、自信、作戦能力の3因子において、メン選手の平均値がウィメン選手に比べて有意に高く、協調性においては、ウィメン選手がメン選手に比べて有意に高いことが明らかになった。

さらに、12尺度においても、自己コントロール能力、自信、決断力、判断力の4尺度については、メン選手の平均値がウィメン選手に比べて有意に高い値を示し、一方、協調性については、ウィメン選手がメン選手に比べて有意に高い値を示した。従って、メン選手はウィメン選手に比べて、緊張を強いられる場面であっても、安定したパフォーマンスを発揮してゲームを的確にコントロールでき、ウィメン選手はメン選手に比べて、協力的で相互に尊重し合うことが明らかになった。

さらに、筆者ら¹⁰⁾は、第二報にて、競技歴が異なるアルティメット選手を対象として、同じくDIPCA.3を実施し、以下のような結果を得ている。

アルティメット競技歴5年以上の選手におけるDIPCA.3の総合得点の平均値は、187.80であり、一方、5年未満の選手における平均値は177.24というものであった。総合得点の平均値は、競技歴5年以上の選手が、5年未満の選手に比べて有意に高かった。5年以上の選手は、5年未満の選手に比べて、心理的競技能力が高いことが考えられる。

また、DIPCA.3における5因子の中でも、精神の安定・集中、自信、作戦能力の3因子の平均値では、競技歴5年以上の選手が5年未満の選手に比べて有意に高いこと

が明らかになった。

さらに、DIPCA.3における12尺度においても、有意な差が観察されたが、自己コントロール能力、リラックス能力、集中力、自信、決断力、予測力、判断力という7尺度の平均値では、競技歴5年以上の選手が、5年未満の選手に比べて有意に高い値を示した。

従って、競技歴5年以上の選手は、5年未満の選手に比べて、緊張を強いられる場面であってもリラックスしてパフォーマンスを発揮し、また、失敗を恐れず、自信を持って、ゲームをコントロールでき、さらには、冷静で落ち着いたプレーをコンスタントに実施できることが推察される。

本研究の目的は、アルティメットのウィメンオーストラリア代表選手、並びに、日本代表選手を対象にDIPCA.3の実施し、心理的競技能力における違いを明らかにすると共に、アルティメットにおける競技能力向上の為の基礎的資料を作成することである。

方 法

対象者

検査の対象は、本年7月にイギリスのロンドンで開催された2016WUGCにおいて、出場26カ国中、5位に

入賞したウィメンオーストラリア代表選手19名(年齢27.37±13.63 [21~41]歳)並びに、同じく4位に入賞したウィメン日本代表選手26名(年齢25.12±8.88 [20~34]歳)であった。

検査期日

ウィメンオーストラリア代表選手19名には、平成28年3月に、ウィメン日本代表選手26名には、平成28年2月に実施した。

検査方法

徳永らが開発したDIPCA.3を実施した。

DIPCA.3は、スポーツ選手が、パフォーマンスを発揮するために必要な心理的競技能力を診断するものである。

心理的競技能力を、競技意欲、精神の安定・集中、自信、作戦能力、協調性の5因子と規定し、さらに、各因子は、忍耐力、闘争心、自己実現意欲、勝利意欲、自己コントロール能力、リラックス能力、集中力、自信、決断力、予測力、判断力、協調性の12尺度から構成されている。(表1)

また、12尺度の具体的な内容は表2の通りである。

表1. DIPCA.3における心理的競技能力の因子および尺度

5 因子	12 尺度
競 技 意 欲	忍耐力・闘争心・自己実現意欲・勝利意欲
精神の安定・集中	自己コントロール能力・リラックス能力・集中力
自 信	自信・決断力
作 戦 能 力	予測力・判断力
協 調 性	協調性

出所：徳永幹雄：「T.T式メンタルトレーニングの進め方～心理的競技能力診断検査の手引き～」p.8 (株)トーヨーフィジカル出版部 2009

表2. 12尺度の具体的な内容

1. 忍耐力	がまん強さ、ねばり強さ、苦痛に耐える。
2. 闘争心	大試合や大事な試合での闘志やファイト、燃える。
3. 自己実現意欲	可能性への挑戦、主体性、自主性。
4. 勝利意欲	勝ちたい気持ち、勝利重視、負けず嫌い。
5. 自己コントロール能力	自己管理、いつものプレイ、身体的緊張のないこと、気持ちの切りかえ。
6. リラックス能力	不安、プレッシャー、緊張のない精神的なリラックス。
7. 集中力	落ち着き、冷静さ、注意の集中。
8. 自信	能力・実力発揮・目標達成への自信。
9. 決断力	思いきり、すばやい決断、失敗を恐れない決断。
10. 予測力	作戦の的中、作戦の切りかえ、勝つための作戦。
11. 判断力	的確な判断、冷静な判断、すばやい判断。
12. 協調性	チームワーク、団結心、協調、励まし。

出所：徳永幹雄：「T.T式メンタルトレーニングの進め方～心理的競技能力診断検査の手引き～」p.12 (株)トーヨーフィジカル出版部 2009

検査は、48の質問項目、並びに、回答の信頼性を判定する4項目(Lie Scale)、合計52の質問構成となっている。

各質問に対する解答は全て、1. ほとんどそうでない(0~10%)、2. ときたまそうである(25%)、3. ときどきそうである(50%)、4. しばしばそうである(70%)、5. いつもそうである(90~100%)の5段階に分けられており、被験者は最も自らに当てはまる番号を選ぶというものである。番号はそのまま得点となり、12の尺度が各20点満点となっていることから、総合得点は240点満点となる。尚、Lie Scale(20点満点)が、12点以下であれば、信頼性が乏しいと判断し、診断を回避する。

分析方法

DIPCA.3の採点、得点判定、プロフィールの作成は、

徳永¹³⁾の手引書に従って行った。まず、5つの因子において平均値と標準偏差をオーストラリア代表選手、並びに、日本代表選手で求め、両国における平均値の差をウェルチのt検定を用いて分析した。(表3)次に、12の尺度においても両国の平均値と標準偏差を求め、同様にウェルチのt検定を用いて分析した。(表4)

結果並びに考察

オーストラリア代表選手におけるDIPCA.3総合得点の平均値は、187.95であり、一方、日本代表選手の平均値は、175.00というものであった。(表4)。総合得点の平均値は、オーストラリア代表選手が、日本代表選手に比べて有意に高かった。オーストラリア代表選手の心理的競技能力が高いことが考えられる。

また、表5は、心理的競技能力における総合得点の判定表である。オーストラリア代表選手は、4(やや優れ

表3. オーストラリア代表と日本代表の因子得点における平均値と標準偏差、並びに因子別プロフィールレベル(1~5)

5因子	2016 AUS (19名)			2016 JPN (26名)			t 値
	平均値	標準偏差	レベル	平均値	標準偏差	レベル	
競技意欲	58.32	5.27	3	64.19	6.21	4	-3.42**
精神の安定・集中	50.26	5.70	5	45.04	7.56	4	2.64*
自信	31.42	3.95	4	23.88	4.21	3	6.15***
作戦能力	29.68	3.58	4	23.42	9.01	3	5.88***
協調性	18.26	1.48	5	18.46	1.92	5	-0.39

* : p < 0.05 ** : p < 0.01 *** : p < 0.001

表4. オーストラリア代表選手と日本代表選手(2016)の心理的競技能力12尺度における得点の平均値と標準偏差

12尺度	2016 AUS (19名)		2016 JPN (26名)		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
忍耐力	17.26	1.48	15.50	1.75	3.65***
闘争心	16.95	1.84	17.62	2.19	-1.11
自己実現意欲	15.53	1.81	15.96	1.93	-0.776
勝利意欲	8.58	2.91	15.12	2.39	-8.01***
自己コントロール能力	17.21	2.18	15.27	2.96	2.54*
リラックス能力	16.21	2.74	13.35	3.05	3.30**
集中力	16.84	2.06	16.42	2.37	0.63
自信	15.84	2.06	11.85	2.13	6.33***
決断力	15.58	2.09	12.04	2.51	5.16***
予測力	13.95	2.17	11.62	1.81	3.81***
判断力	15.74	1.59	11.81	1.96	7.41***
協調性	18.26	1.48	18.46	1.92	-0.39
総合得点	187.95	14.02	175.00	12.53	3.20**

* : p < 0.05 ** : p < 0.01 *** : p < 0.001

ている)であり、日本代表選手は、ワンランク低い、3(もうすこし)の判定であった。

因みに、第一報⁹⁾における我国のウィメンアルティメット選手の総合得点の平均値は、177.85というものであり、また、メンアルティメット選手の平均値は、184.06というものであった。(表6)この結果からウィメンオーストラリア代表選手は、我国のメンアルティメット選手と同程度の心理的競技能力を持ち合わせていることが伺える。

さらに、村上ら⁵⁾が行ったアテネオリンピック出場選手(種目は明らかにされていない)における総合得点の平均値は、女子が181.96、男子が191.40であった。

一方、立谷ら⁸⁾が行ったソルトレークシティー及びトリノ冬季オリンピック代表選手(種目は明らかにされていない)における総合得点の平均値は、ソルトレークシティーでは、女子が171.3、男子が186.9、トリノでは、女子が171.2、男子が177.3というものであった。従って、アルティメット選手の心理的競技能力は決して低くはな

く、特に、オーストラリア代表選手においては、我国のオリンピック男子代表選手に匹敵する程のものであった。この理由として、『優秀な選手、試合中の心理状態が優れている選手、実力発揮度が高い選手は、総合得点が高い』という徳永¹³⁾の指摘の通り、今回のアルティメット選手は各国のA代表選手であることから、競技水準が高い選手達であったことが考えられる。

次に、競技意欲、精神の安定・集中、自信、作戦能力、協調性の5因子得点について国別に検討した。集計した各心理的競技能力の5因子を国別に比較したものが表3である。

競技意欲については、日本代表選手が有意に高く、精神の安定・集中、自信、作戦能力の3因子についてはオーストラリア代表選手が有意に高いという結果となった。

一方、協調性に関しては、有意な差は認められなかったものの、両国とも因子別プロフィールレベルにおいてはレベル5と最上位であった。(表3)

表5. 心理的競技能力総合得点の判定表

判定 評価	1 (かなり低い)	2 (やや低い)	3 (もうすこし)	4 (やや優れている)	5 (非常に優れている)
男子	1 4 1 以下	1 4 2 ~ 1 6 4	1 6 5 ~ 1 8 6	1 8 7 ~ 2 0 9	2 1 0 以上
女子	1 3 1 以下	1 3 2 ~ 1 5 4	1 5 5 ~ 1 7 8	1 7 9 ~ 2 0 2	2 0 3 以上

出所：徳永幹雄：「T.T式メンタルトレーニングの進め方～心理的競技能力診断検査の手引き～」

p. 1 2 (株) トーヨーフィジカル出版部 2 0 0 9

表6. メンアルティメット選手とウィメンアルティメット選手(2013)の心理的競技能力12尺度における得点の平均値と標準偏差(第一報)

12 尺度	2013 JPN MEN (87 名)		2013 JPN WOMEN (74 名)		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
忍耐力	15.43	2.92	16.05	1.90	-1.64
闘争心	17.98	2.52	17.50	2.53	1.19
自己実現意欲	16.36	2.78	16.34	2.20	0.05
勝利意欲	15.75	2.64	15.69	2.47	0.14
自己コントロール能力	16.09	2.88	14.81	3.00	2.75**
リラックス能力	15.07	3.32	14.00	3.83	1.88
集中力	16.48	2.51	15.78	2.76	1.67
自信	14.33	3.01	12.64	3.43	3.31**
決断力	13.76	3.23	12.41	3.16	2.68**
予測力	12.91	2.99	12.58	2.65	0.73
判断力	13.14	3.02	11.76	2.85	2.99**
協調性	16.77	2.60	18.30	2.00	-4.20***
総合得点	184.06	23.26	177.85	18.26	1.90

徳永ら¹¹⁾は、一般的に『男子は、判断力、予測力、自信、決断力、忍耐力、闘争心、勝利意欲で優れ、女子は、自己実現意欲や協調性で優れ、集中力、自己コントロール能力、リラックス能力では顕著な差は認められない』と報告をしている。さらに、徳永¹²⁾は、『近年のデータから、男子は判断力、自信、予測力、決断力、闘争心、自己コントロール能力で有意に高い値を示した。ただ、女子は自己実現で有意に高く、協調性でやや高い傾向がみられた。そして、勝利意欲や集中力には顕著な差は認められなかった。』とも述べている。

また、前述したアテネオリンピック出場選手における性差の比較では、『男子は、闘争心、自信、決断力、予測力、判断力の6尺度について有意に高く、一方、女子選手は、協調性においてやや高い得点を示している。』⁵⁾というものであった。さらに、本間ら¹⁾は、女子種目であるシンクロナイズドスイミングの日本代表選手の協調性が顕著に高いことも報告している。

第一報⁹⁾における我国のアルティメット選手の特徴として、ウィメンアルティメット選手は、メンアルティメット選手に比べて、協調性が有意に高いことも明らかとなっている。(表7) 従って高い協調性は、ウィメンアルティメット選手の特徴的なスキルである可能性が高いと考えられる。

さらに、第一報⁹⁾において、我国のアルティメット選手の特徴として、メンアルティメット選手は、ウィメンアルティメット選手に比べて、精神の集中・安定、自信、作戦能力の3因子について有意に高いことが明らかになっている。(表7)

徳永ら¹¹⁾は、DIPCA.3の各因子に関して、『性差については、内容的には、男子は作戦能力、自信、競技意欲で優れ、女子は自己実現意欲や協調性で優れ、精神の安定・集中では顕著な差は認められない。』と述べている。バイアスロン競技選手を対象とした佐川ら⁷⁾の先行研究においても、『精神の安定・集中、自信、作戦能力、協調性において、男子が女子よりも、有意に高いこと』が認められている。また、小笠原ら⁶⁾も、『自信、作戦能力の因子については男子が、協調性の因子については女子が有意に高い』ことを報告している。以上のことから、オーストラリア代表選手は、先行研究における男性選手の傾向とほぼ同様な因子得点の傾向を示していることが明らかになった。

さらに、筆者らは第二報¹⁰⁾において、『アルティメット競技歴5年以上の選手は、5年未満の選手に比べて、精神の安定・集中、自信、作戦能力の3因子について有意に高い』という結果を得ている。(表8)

表7. メンアルティメット選手とウィメンアルティメット選手の因子得点における
平均値と標準偏差、並びに因子別プロフィールレベル(1~5)

5 因子	2013 JPN MEN (87 名)			2013 JPN WOMEN (74 名)			t 値
	平均値	標準偏差	レベル	平均値	標準偏差	レベル	
競技意欲	68.38	20.90	5	64.19	16.74	4	0.31
精神の安定・集中	47.64	7.89	4	45.04	8.84	4	2.29*
自信	28.09	5.93	4	23.88	6.34	3	3.13**
作戦能力	26.05	5.78	3	23.42	5.12	3	1.99**
協調性	16.77	2.60	4	18.46	2.00	5	-4.20***

* : p < 0.05 ** : p < 0.01 *** : p < 0.001

表8. アルティメット競技歴5年以上の選手と5年未満の選手の因子得点における
平均値と標準偏差

5 因子	2015 競技歴5年以上(40名)		2015 競技歴5年未満(89名)		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
競技意欲	64.23	9.68	63.08	6.60	0.69
精神の安定・集中	48.84	8.16	42.92	8.05	4.29***
自信	28.66	6.45	25.72	5.26	2.65*
作戦能力	27.78	5.98	24.66	5.10	2.86**
協調性	17.60	2.92	16.99	2.60	1.14

* : p < 0.05 ** : p < 0.01 *** : p < 0.001

また、徳永¹⁵⁾は、DIPCA.3の各因子に関して、『10年以上のスポーツ経験者は、精神の安定・集中、自信、作戦能力で優れている』と述べている。一方、学生ソフトテニス選手を対象とした古谷ら³⁾の先行研究においても、『中学校以前に競技を開始した選手が、高校、あるいは、大学から開始した選手に比べ、男女共に、競技意欲、自信、作戦能力、協調性において、有意に高い』ことが報告されている。さらに、女子ハンドボール選手を対象とした檜塚ら⁴⁾においても、『5因子全てにおいて、競技経験が長い選手が有意に高い』ことを報告している。

今回のオーストラリア代表選手のアルティメット競技歴は、19名中、10年以上の選手が7名、5～9年の選手が7名存在していることから、これらの選手達の長い競技歴が結果に影響を及ぼしたことが推察される。

徳永¹⁵⁾は、『経験年数が10年以上にもなると、多くの試合に参加し、その体験から、試合場面で必要な心理的能力を身につけていることが推測されます。このことがキャリア（経験）の差ということでしょう。例えば、ここは「耐えなければならない」という時に忍耐力を発揮出来るということです。試合の場で生じるいろいろな場面で、それが必要とされる時に、必要な能力を発揮できるということです』と述べている。

今回の検査対象としたアルティメット選手は、先行研究における他のスポーツ種目選手とほぼ同様な因子得点の傾向を示した。このことから、アルティメット選手の

心理的競技能力が他のスポーツ種目選手とほぼ同様の特徴を示していると推察できよう。さらに、精神の集中・安定、自信、作戦能力における3因子については、オーストラリア代表選手の平均値が、第一報における我国のメンアルティメット選手（表7）の値を上回るものであることから、オーストラリア代表選手は、やはり我国のメンアルティメット選手に匹敵する程の高い心理的競技能力を持ち合わせていることが推察される。

最後に心理的競技能力12尺度得点における両国の違いについて検討した。心理的競技能力の12尺度得点を国別に集計したものが表4である。また図1は両国の尺度別プロフィールである。

先ず、オーストラリア代表選手における12尺度の得点順位が高い順は、1. 協調性、2. 忍耐力、3. 自己コントロール能力、4. 闘争心、5. 集中力、であった。一方、日本代表選手における12尺度の得点順位が高い順は、1. 協調性、2. 闘争心、3. 集中力、4. 自己実現意欲、5. 忍耐力であった。両国共に、協調性が最も高い尺度であった。アルティメットのゲームでは、他の競技スポーツ同様に、チーム内でのコミュニケーションや互いを尊重する姿勢も重要なスキルとなる。前述したように、筆者らは第一報⁹⁾、並びに、第二報¹⁰⁾においても同様な結果を得ており、繰り返すが、協調性は、アルティメット選手の心理的特徴である可能性を示唆していると考えられる。また、アルティメットのゲームでは、男女を問わず、

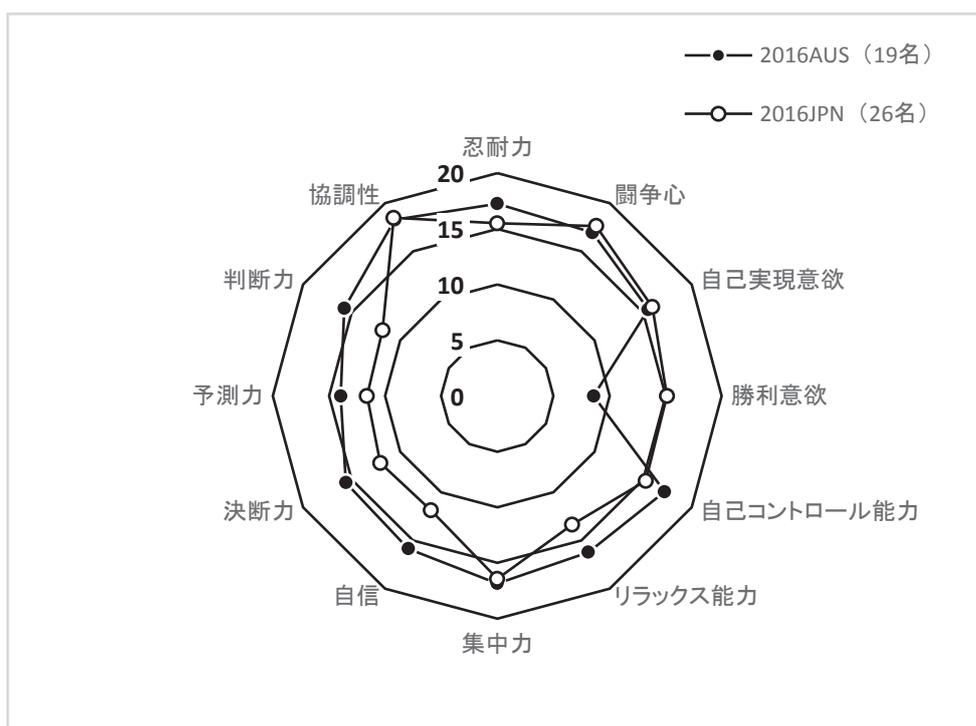


図1. オーストラリア代表選手と日本代表選手（2016）の尺度別プロフィール

高いファイティングスピリットと積極的なプレーが要求されるため、戦う姿勢を全面に押し出す必要がある。両国共に、高い尺度であった忍耐力や闘争心も第一報⁹⁾、並びに、第二報¹⁰⁾においても高い尺度であったことから、この2つの尺度についても、同様に、アルティメット選手の心理的特徴である可能性を示唆していると考えられる。

また、徳永¹⁴⁾は、プロフィール表において『線が外側に広がり、高得点になるほど望ましいといえます。また、線のデコボコ(凸凹)が少ないほどバランスがとれています。すなわち、円が外側に大きく、デコボコが少ないほど望ましい心理状態』であると述べている。図1.のプロフィール表でも協調性、忍耐力、闘争心の3尺度が両群共に外側に近いことは、アルティメット選手の特徴が示唆されていると思われる。

その一方で、オーストラリア代表選手が、忍耐力や闘争心は決して低くはないのにも拘らず、勝利意欲が8.58と高くはないという結果は極めて特徴的であった。数ある先行研究においても、勝利意欲が10点を下回る平均値は見当たらなかった。今回のオーストラリア代表選手のメンバーに、昨年、オーストラリアに留学中で代表に選出された鮫島 萌選手(2012WUGC ウィメン日本代表優勝メンバー)がおり、彼女に聞き取り調査を行ったところ、『確かに、試合結果よりも、試合内容を重視したチームだったかもしれない。また、夏のオーストラリアから冬の日本という寒暖の差が大きい時期(3月初旬)の来日の為、コンディショニングが難しかったこと、代表チームとしての練習・合宿不足による連携不足やミスが多いことから、メンバーの多くが、かなりナーバスになっていた。』というコメントを頂戴している。

さて、今回のアルティメット選手における12尺度においても、有意な平均値の差が観察されたが、忍耐力、自己コントロール能力、リラクセス能力、自信、決断力、予測力、判断力という7尺度において、オーストラリア代表選手が、日本代表選手に比べて、有意に高い値を示した。一方、勝利意欲において、日本代表選手がオーストラリア代表に比べて、有意に高い値を示した。従って、オーストラリア代表選手は、日本代表選手に比べて、緊張を強いられる場面であってもリラックスしてパフォーマンスを発揮し、また、失敗を恐れず、自信を持って、ゲームをコントロールでき、さらには、冷静で落ち着いたプレーをコンスタントに実施できることが推察される。

おわりに

2016WUGCにおいて、ウィメン日本代表は、予選リーグを6戦全勝で、決勝トーナメント(準々決勝)進出を果たした。一方、オーストラリア代表は、コロンビア、ロシアに破れ、予選リーグを3勝2敗で終え、決勝トーナメント進出をかけたフィンランド戦に勝利した。決勝トーナメント1回戦(準々決勝)は、日本代表とオーストラリア代表の直接対決となり、日本代表が15対6で勝利した。その後、日本代表は準決勝でコロンビアに敗れ、3位決定戦でもカナダに破れ、4位で大会を終えている。また、オーストラリア代表は、5~8位トーナメントで、ドイツ、ロシアに連勝し、5位で終えている。

第四報では、2016WUGCのメン部門に出場し、準優勝した日本代表選手、並びに、3位のオーストラリア代表選手におけるDICPA.3の比較検討を行う予定である。

謝 辞

本研究に際しては、日本アルティメット協会の方々には格別な配慮を賜りました。ここに氏名を記して深甚の感謝を捧げる次第です。

日本アルティメット協会会長 本田 雅一氏

同チーフプロデューサー 大井 誠氏

同プロデューサー 梅原 貴正氏

注

1) アルティメットのゲームの進め方

ゲーム開始前に、オフenseとディフェンスを決め、各々のエンドゾーン内に横一列に並び、ディフェンスチームからのスローオフでゲーム開始となります。スローオフ前には、どちらのチームともゴールラインより前には出られません。両チームとも相手のエンドゾーンがゴールとなり、オフenseチームは、味方同士のディスクのパスで攻撃を展開していきます。その際、ディスクを持っているプレーヤーは歩くことができません。ディスクを保持したプレーヤーが軸足を移動したり、歩いたりするとトラベリングという反則になります。パスしたディスクが地面に落ちたり、アウト・オブ・バウンズとなった場合(ラインから出た場合)、または、ディフェンスチームのプレーヤーにインターセプト、あるいは、パスカットされる、ストーリングアウトになる(マーカーはスローワーの3m以内の位置についた時点で「ストーリング」とコールし、1秒間隔で10(テン)カウントを始める。スローワーは10の声が発せられる前にディスクを投げないとストーリングアウトとなる。)等がおきた場合などは、ターンオーバー(T.O.)となり、その場

で攻撃権は、相手のチームに移ります。プレー中にディフェンスへの走路妨害が起こった場合は、ピックという反則になります。1点入るごとにコートチェンジを行い、前のプレーで得点したチームがディフェンスとなり、スローオフを行います。

(<http://www.japanultimate.jp/> 日本アルティメット協会より引用)

2) フライングディスク

フライングディスクとはプラスチック製の円盤状のディスクのことで、一般にはfrisbee (Frisbee) という名称 (アメリカ・ワムオー社製の登録商標) で呼ばれることもあります。フライングディスクの起源は、1940年代、アメリカのアイビーリーグの名門校であるエール大学の学生たちが、キャンパス近くの「frisbee・ベーカー」の皿を投げ合ったのが始まりといわれています。その光景に興味を持った建築検査員のフレッド・モリソン氏が1948年、金属製のディスクを試作し、その後の改良で現在のプラスチック製のディスクが誕生しました。いまでは、材質に改良が重ねられフライングディスクの飛行性能は、最長飛距離「255m」、最高時速「時速140km」、最長滞空時間「16.72秒」ときわめて優れたものとなっています。

(<http://www.jfda.or.jp> 一般社団法人 日本フライングディスク協会より引用)

一般社団法人 日本フライングディスク協会によれば、『本協会が加盟している世界フライングディスク連盟 (WFDF) の加盟・準加盟国は56カ国で、全世界における愛好者人口は約6,000万人、競技者人口は700万人に達するといわれており、1989年には、IOCが後援する非オリンピック種目の世界大会「ワールドゲームス」のエキジビション種目となりました。そして、2001年8月に秋田で開催された第6回ワールドゲームスからは正式競技に採用されました。1995年には、国際スポーツ90団体の連合体であるGAISF*の正会員にも認められており、2013年にはWFDFがIOC (国際オリンピック委員会) に準公認団体として認められ、オリンピック種目化への第一歩を踏み始めました。その他、フライングディスクは、文部科学省をはじめとする様々な組織が主催する生涯スポーツ講習会に採用されており、1999・2000・2002・2003年にはNHK教育テレビの番組「テレビ・スポーツ教室」にも取り上げられ、スポーツとしての認識が高まってきました。(財) 笹川スポーツ財団の「スポーツライフ・データ調査」によれば、フライングディスクの愛好者人口は約150万人に達しており、150校を超える中学・高校・大学などの授業にも採用さ

れています。また、1996年からは全日本アルティメット選手権大会が文部科学大臣杯をいただく大会に認められました。』

(<http://www.jfda.or.jp> 一般社団法人 日本フライングディスク協会より引用)

* GAISF : General Association of International Sports Federation

国際スポーツ連盟機構。オリンピック種目以外の国際大会を主管する。

フライングディスク競技には、アルティメットを含め、公認されている10種目が存在する。詳細については、<http://www.jfda.or.jp> 一般社団法人 日本フライングディスク協会のHPを参照されたい。

3) アルティメット日本代表の戦績

本年7月イギリス・ロンドンで開催された、2016 WUGCに出場した日本代表の戦績は、メン部門が準優勝、ウィメン部門が4位、ミックス部門が6位、マスターメン部門が5位、マスターウィメン部門が4位であった。

また、7~8月ポーランド・ヴロツワフで開催されたU-19世界ジュニアアルティメット選手権に出場した日本代表の戦績は、メン部門が6位、ウィメン部門が11位であった。

以下に、過去の日本代表の戦績を示す。

日本代表の戦績（アルティメット）

年	開催国	O	W	M	OM	WM	U20 O	U20 W
2016	WFDF2016 世界アルティメット&ガッツ選手権大会 /イギリス・ロンドン	準優勝	4位	6位	5位	4位	-	-
2015	WFDF2015 アジア・オセアニアアルティメット選手権大会 /香港	優勝	-	3位	-	-	-	-
2015	WFDF2015 世界 U-23 アルティメット選手権大会 /イギリス	3位	優勝	7位	-	-	-	-
2015	世界ビーチアルティメット選手権大会 /UAE	10位	-	15位	-	-	-	-
2014	世界アルティメットクラブチーム選手権大会 /イタリア	7位	6位	8位	6位	4位	-	-
2014	世界ジュニア (U-19) アルティメット選手権大会 /イタリア	-	-	-	-	-	9位タイ	7位タイ
2013	ワールドゲームズ /コロンビア	-	-	5位	-	-	-	-
2013	世界 U-23 アルティメット選手権大会 /カナダ	6位	準優勝	3位	-	-	-	-
2012	世界ジュニア (U-19) アルティメット選手権大会 /アイルランド	-	-	-	-	-	9位	8位
2012	世界アルティメット&ガッツ選手権大会 /日本 (堺)	5位	優勝	3位	3位	3位	-	-
2011	アジア・オセアニア アルティメット選手権大会 /台湾	優勝	-	優勝	-	-	-	-
2011	世界ビーチアルティメット選手権大会 /イタリア	-	9位	-	-	-	-	-
2010	世界ジュニア (U-19) アルティメット選手権大会 /ドイツ	-	-	-	-	-	13位	7位
2010	世界 U-23 アルティメット選手権大会 /イタリア	準優勝	準優勝	-	-	-	-	-
2010	世界アルティメットクラブチーム選手権大会 /チェコ	3位	準優勝	16位	9位	-	-	-
2009	アジア・オセアニア アルティメット選手権大会 /フィリピン	優勝	-	-	-	-	-	-
2009	ワールドゲームズ /台湾	-	-	準優勝	-	-	-	-
2008	世界アルティメット&ガッツ選手権大会 /カナダ	3位	準優勝	準優勝	6位	-	8位	優勝
2007	アジア・オセアニア アルティメット選手権大会 /台湾	-	-	優勝	-	-	-	-
2006	世界アルティメットクラブチーム選手権大会 /オーストラリア	優勝	優勝	18位	優勝	-	-	-
2005	ワールドゲームズ /ドイツ	-	-	4位	-	-	-	-
2004	世界アルティメット&ガッツ選手権大会 /フィンランド	5位	4位	8位	6位	-	10位	4位
2002	世界アルティメットクラブチーム選手権大会 /アメリカ	10位	8位	11位	5位	-	-	-
2001	ワールドゲームズ /日本 (秋田)	-	-	3位	-	-	-	-
2000	世界アルティメット&ガッツ選手権大会 /ドイツ	8位	準優勝	7位	8位	-	7位	-
1999	世界アルティメットクラブチーム選手権大会 /スコットランド	16位	3位	準優勝	-	-	-	-
1998	世界アルティメット&ガッツ選手権大会 /アメリカ	準優勝	準優勝	-	4位	-	-	-
1997	世界アルティメットクラブチーム選手権大会 /カナダ	11位	12位	-	15位	-	-	-
1996	世界アルティメット&ガッツ選手権大会 /スウェーデン	4位	3位	-	8位	-	-	-
1995	世界アルティメットクラブチーム選手権大会 /イギリス	17位	5位	-	-	-	-	-
1994	世界アルティメット&ガッツ選手権大会 /イギリス	5位	6位	-	7位	-	-	-
1993	世界アルティメットクラブチーム選手権大会 /アメリカ	27位	16位	-	-	-	-	-
1992	世界アルティメット&ガッツ選手権大会 /日本 (宇都宮)	3位	優勝	-	3位	-	準優勝	-
1991	世界アルティメットクラブチーム選手権大会 /カナダ	29位	13位	-	-	-	-	-
1990	世界アルティメット&ガッツ選手権大会 /ノルウェー	9位	9位	-	-	-	-	-
1989	世界アルティメットクラブチーム選手権大会 /ドイツ	14位	7位	-	-	-	-	-
1988	世界アルティメット&ガッツ選手権大会 /ベルギー	9位	10位	-	-	-	-	-
1986	世界アルティメット&ガッツ選手権大会 /イギリス	9位	13位	-	-	-	-	-
1984	世界アルティメット&ガッツ選手権大会 /スイス	8位	-	-	-	-	-	-

O：オープン部門／W：ウィメン部門／M：ミックス部門／OM：オープンマスターズ部門／WM：ウィメンマスターズ部門／U20 O：U20 オープン部門／U20 W：U20 ウィメン部門

(注1) 複数チーム派遣の場合は、最高位のみを記載

(注2) 派遣チーム無し、又は開催部門無しの場合は「-」と記載

(注3) 2016年より、「U19」→「U20」と名称変更

出所：http://www.japanultimate.jp/ 日本アルティメット協会

文 献

- 1) 本間三和子：「シンクロナイズドスイミング日本代表選手の心理的競技能力」 pp.1～9 水泳水中運動科学 12 卷 1 号 (2009)
- 2) <http://www.jfda.or.jp> 一般社団法人 日本フライングディスク協会より引用
- 3) 古谷 学・谷口幸一：「学生ソフトテニス選手の心理的競技能力に関する研究」 pp.29～38 九州体育学研究 7 (1) (1993)
- 4) 檜塚正一・伊達萬里子・田島恭江・田中美紀：「女子ハンドボール選手の心理的競技能力に関する研究～経験年数および大会参加経験別による比較～」 pp.55～62 武庫川女子大学紀要 48 (2000)
- 5) 村上貴聡・今井恭子・菅生貴之・立谷泰久・石井源信：「アテネ五輪代表選手を対象としたメンタルチェックに関する報告」 pp.31～32 日本スポーツ心理学会第31回大会発表抄録集 (2004)
- 6) 小笠原義文・浅沼道成：「高校一流選手の心理的競技特性に関する事例研究～岩手県ミニ国体出場選手を対象に～」 pp.173～183 岩手大学人文社会科学研究紀要 No.58 (1996)
- 7) 佐川正人・佐々木茂喜・小林 規・神林 勲：「バイアスロン競技選手の心理的競技能力の特徴」 pp.1～8 冬季スポーツ研究 1 卷 1 号 北海道教育大学冬季スポーツ教育研究センター (1997)
- 8) 立谷康久・今井恭子・山崎史恵・菅生貴之・平木貴子・平田大輔・石井源信・松尾彰文：「ソルトレークシティ及びトリノ冬季オリンピック代表選手の心理的競技能力」 pp.13～20 Japanese Journal of Elite Sports Support vol. 1 国立スポーツ科学センター (2008)
- 9) 瀧澤寛路・村本名史・栗田泰成・高根信吾・笹川 慶：「アルティメット選手の心理的競技能力について～第一報～」 pp.29～37 常葉大学経営学部紀要 第2巻第2号 (2015)
- 10) 瀧澤寛路・村本名史・栗田泰成・笹川 慶・高根信吾：「アルティメット選手の心理的競技能力について～第二報～」 pp.27～35 常葉大学経営学部紀要 第3巻第2号 (2016)
- 11) 徳永幹雄・吉田英治・重枝武司・東 健二・稲福 勉・斉藤 孝：「スポーツ選手の心理的競技能力にみられる性差、競技レベル差、種目差」 pp.109～120 健康科学 22 (2000)
- 12) 徳永幹雄：「スポーツ選手に対する心理的競技能力評価の尺度の開発とシステム化」 pp.91～102 健康科学 23 (2001)
- 13) 徳永幹雄：「T.T 式メンタルトレーニングの進め方～心理的競技能力診断検査の手引き～」 pp.8～15 (株) トーヨーフィジカル出版部 (2009)
- 14) 徳永幹雄：「ベストプレイへのメンタルトレーニング～心理的競技能力の診断と強化～」 p.28 大修館書店 (2010)
- 15) 徳永幹雄：「ベストプレイへのメンタルトレーニング～心理的競技能力の診断と強化～」 p.53 修館書店 (2010)

